

第40回

少年の主張大会

作文集



高浜市

高浜市教育委員会

「少年の主張大会」は今年で第40回を迎えます。本大会を通して、これからの高浜を担う青少年の表情に触れることができ、大変うれしく思います。

新型コロナウイルスの感染拡大から3年以上が経過しましたが、5月には5類感染症への移行がされたことで行動制限等が大幅に緩和され、学校や家庭での生活も少しずつ以前の形に戻ってきていると思います。今まで様々な制限を受けながら日々を過ごしてきた皆さんが、現在の社会に対してどのようなことを感じ、考えているのか、私たち大人が理解するよいきっかけとなればと思います。

今回の発表では、子どもたちの新鮮な感性から紡ぎだされる彼らの夢や希望、真摯な考え方に触れることができます。大人が子どもの心を理解し、子どもたちが進むべき道筋を作り上げていくことが我々大人に課せられた使命であると感じます。本市の第7次総合計画において掲げております「人と想いが つながり つながる しあわせなまち 大家族たかはま」を目指し、青少年が夢に向かって成長し続けられる高浜市をつくりあげていくために、引き続きみなさまのご助力をお願いいたします。

最後になりましたが、本大会を開催するにあたり、お力添えをいただきました皆様に深く感謝申し上げます。

高浜市長 吉岡 初浩

高浜市の少年の主張大会も第40回を迎えました。地域社会での人間関係の希薄化、家庭や地域の教育力の低下などが叫ばれ、青少年を取り巻く環境は多くの課題が生じています。こうした課題を解決するため、地域の大人と子ども、大人同士、子ども同士のコミュニケーションを広げることが大切です。

子どもの頃から、自分の意見をしっかりもち、意見の異なる他者を受け入れながら、バランスを保って物事に取り組むことが、コミュニケーション能力を養い、生きる力にあふれた次世代を築くことに繋がります。

まずは、私たち大人が地域の中で子どもたちに目を向け、社会全体で子どもを育てるという意識をもち、他者への思いやりを大切にする態度を示すことが重要であると思います。

最後になりましたが、子どもたちの豊かな成長にお力添えをいただいている皆様に感謝申し上げますと共に、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

高浜市教育委員会
教育長 岡本 竜生



小学生の部

☆学校給食と食品ロス	高浜小学校6年	村上 航彗	……	2
☆自分らしく	吉浜小学校6年	鈴木 奈沙	……	3
☆私の気持ちの伝え方	高取小学校6年	柴田 奈実	……	5
☆食べ物大切さ	港小学校6年	浅井 優花	……	7
☆私のやるべきこととは	翼小学校6年	杉浦 春妃	……	8

中学生の部

☆「届け。」	高浜中学校3年	加藤 美仰	……	10
☆間違いから学ぶ	南中学校3年	磯道 秀伍	……	11

高校生の部

☆「自分らしく」生きるということ	高浜高等学校3年	山口 稀	……	13
------------------	----------	------	----	----

〔敬称略〕





学校給食と食品ロス

高浜小学校6年 村上 航慧

僕は、小学校に入学してから五年間、一度も給食を残したことはありませんでした。けれども、先日できてしまったヘルペスのせいで、口が痛くてどうしても全部食べることができなくなり、初めて給食をのこしてしまいました。とてもくやしい気持ちになりました。周りの同級生にも、給食を残している子はいます。でもそれは、食べる時間が無くなって残してしまう子や、おかわりをしたけれども食べきれずに残してしまう子、嫌いだからそもそも食べずに残す子がほとんどだと思います。

お父さんやお母さんが子どもの頃は、給食の時間内に食べきれなかった場合、昼休みになっても教室に残って食べさせられていたこともあったらしいです。けれども今の先生たちは、「なるべく残さないように。」

とは言うけれど、

「食べきれないのならしかたがないね。」

とも言ってくれます。去年のクラスでは、小盛り、中盛り、大盛りと、自分で食べきれそうな量を選ぶことができるようにしてみました。それでも残してしまう子がいました。

学校給食の食べ残しは、年間約五万トンで、子ども一人当たりになると、年間7・1キログラムも食べ残しをしている計算になるそうです。僕が想像していたよりも、はるかに多い量でした。どうしたら残飯を無くすことができるのかを、自分なりにいくつか考えてみました。

一つ目は、給食の時間を長くする方法です。いつも給食を残しがちな子は、他の人よりも早めに食べ始められるようにすれば、時間内に食べきれの子が増えると思います。でも、好き嫌いで残してしまう子は、時間があっても食べようとしないと思います。

二つ目は、給食をやめて、弁当にする方法です。学校から出る残飯は無くなるけれど、毎日弁当を作るお母さんたちが大変になってしまいます。事情があって、弁当をもってこれない子がいるかもしれないかもしれません。そもそも僕を含めて、給食が大好きな子が多いので、給食が無くなってしまうのは悲しいです。

三つ目は、全部食べきったら、ごほうびをもらえるシステムを作る方法です。一部の男子は張り切って食べるようになるかもしれないけれど、そのうち飽きてしまって長くは続かないかもしれません。それに、ごほうびのために全部食べるというのは、何かが違うよう





な気がします。

四つ目は、一人一人が、好き嫌いを無くすための努力をする方法です。家の人にも協力してもらって、嫌いな物でも少しずつ食べられるようになっていけばいいと、考えてはみたものの、全員の努力を求めるとなると、これも難しいと思います。正直、残飯を完全に無くすための、画期的な一つの方法を生み出すことは難しいと思います。

僕が調べたところ、給食の残飯は、家畜の飼料などになっているようです。しかし、運搬時や焼却処分するときに出る二酸化炭素は、地球温暖化の原因になっているそうです。僕はピーマンやなすが苦手です。でも、給食に出されるものは、肉と一緒に料理されていたり、匂いが消えていたりするので、食べられます。苦手な子でもおいしく食べられるように、工夫をこらして献立を考えてくださっていることが分かります。小学校の給食委員会では、好きな給食アンケートをもとに、人気のあるメニューを特別に用意してくれたりもしています。

給食の残飯を無くすための画期的な方法は無いのかもしれませんが、いろいろな人たちが、それぞれの立場で、できることを考えて、実践してくれています。だから、給食を食べている僕たちも、それぞれできることから初めてみてはどうかと思います。まずは、みなさん、給食の残飯が毎日当たり前に出てしまうことに、問題意識をもち、自分なりにこの問題について考えてみてはいかがでしょうか。

自分らしく

吉浜小学校6年 鈴木 奈沙

みなさんは、「男性らしさ・女性らしさ」と聞くと、どのようなことを思い浮かべますか。男性ならば、「かっこいいものが好きで、女性のことを好きになる。」女性ならば、「かわいいものが好きで、男性のことが好きになる。」これが普通であると考える人は多いのではないのでしょうか。けれど、世の中にはそうではない人もたくさんいます。

自分は女性です。けれど、スカートは履かないし、髪の毛も短いです。あまり女性らしくない格好をしています。ある日の学校からの帰り道、友達と一緒に帰っていると、「何で奈沙ってそんな格好をしているの。」と聞かれました。自分は、「この格好が好きだからだ





よ。」と返しました。そうしたら友達は、「女の子なのに男の子っぽい服が好きなんておかしいよ。女の子なのだから、女の子らしい格好をした方がいいよ。」と言いました。

その時、自分は、自分自身のことを否定されたような感覚になり、とても悲しい気持ちになりました。

「女性なら女性らしい格好をしなければいけない」と周りの人は考えるかもしれませんが、自分はそういう格好をしたくないという気持ちがあり、自分の考えは普通ではないのかと悩んでしまいました。

ある日、ネットの記事を見ていたら「LGBT」というものがあることを知りました。

『女性ならば女性らしく、男性ならば男性らしく』という性別にしばられず、自分のありのままの自由でいい」ということが書かれていました。

自分は気になって、今、LGBT に対してどのように考えている人が多いのか、さらに調べてみました。

調べているうちに、トランスジェンダーやレズビアン、ゲイの人たちが、「同性に恋をするなんておかしい」とか「身体は男性なのに心が女性なんて人間じゃない」など心ない言葉を言われ、差別されていることを知りました。

それを知った時、何でそんなことを言うんだろうと悲しくなりました。

その人も同じ人間なのに、周りとは少し違うだけで差別を受けたり、おかしいと言われたりするとは、きっと苦しいだろうなと思いました。

このことを家族に話してみたら、「女は女らしく、男は男らしくしないと、LGBT の人を受け入れられない人が『何で認めないんだ』と非難されて、逆にその人が生きづらくなってしまう。」と言いました。

自分は、そのような考えもあるんだなと思い、びっくりしました。それと同時に、確かにその通りかもしれないなとも思いました。

LGBT の人たちへの差別を無くそうとして、LGBT を受け入れられない人を強く非難し、逆の差別が起きてしまう。

そういう考えもあるかもしれない。けれど、自分は LGBT に対する理解がもっと深まれば、苦しい思いをする人はきっと減ると思います。

「女は女らしく、男は男らしく」

そういった考えが減っていかなければ、苦しむ人は絶対にいなくなりません。だから、私は少しでも LGBT に対する理解が深まり、みんなが一人一人の「個性」として認め合えるようになって欲しいです。

みんながみんな、LGBT の人ではありません。だから、全ての人が全てを理解して平等に接していくことは難しいかもしれません。け





れど、自分は「LGBTの人たちはおかしい」という偏見を無くして、みんながみんな同じじゃなくていい、「あなたはあなただから」とみんなが認め合える未来にしていきたいです。

みなさんもこれから、LGBTのことで悩んでいる人と接することがあるかもしれません。その時に、「男だから・女だから」という見方を少し変えてみて、「あなたはあなただから」とその人の個性としてとらえていきませんか。そして、『みんな』で明るい未来を目指していきませんか。

私の気持ちの伝え方

高取小学校6年 柴田 奈実

「この手紙を渡したらどんな顔するかな」

私は相手の喜ぶ顔を思い浮かべながら手紙を書きます。みなさんは、手紙をよく書きますか。最近の手紙は、おもしろいしかけがついているものがたくさんあると思うので、手紙を普段書かない人でも、楽しみながらかけると思います。姉からもらったポップアップカードは、とてもおもしろかったです。

でも最近、母や姉は誕生日などにお祝いの言葉をメールで送ります。そこで、私はメールと手紙の違いを考えてみました。

まずは、相手に届けるのが簡単かどうかです。

メールは近くにいる相手でも離れたところにいる相手でも、普通の会話のように気持ちを送り合うことができます。ですが、手紙の場合は、便せんを選んで、相手に直接渡すかポストに手紙を出さなければいけません。なので、手紙の方が、少し準備が大変なことが分かります。

この大変さのおかげで、日常では気付けない気持ちを語れるのではないかと思います。

次に、文字の形です。

タブレットやスマホで、文字を打つ場合は、「ザ・機械」という印象の文字で、誰が打っても同じ文字です。しかし、手紙で文字を書くと、手紙を書いている時の気持ちが文字に現れると思います。なので、手紙を送った相手にメールよりも強く、分かりやすく気持ちが伝わると思います。

この「文字の形」について、よく考えた手紙には二通あります。

一通目は、四年生のときに受けた「命の授業」のすぐ後に書いた、





私が生まれてきたこれまでのことについての手紙です。そのときに手紙を書くときは少し緊張しました。生まれてから四年生までの人生を振り返って私のことを産んでくれたお母さんに感謝を述べるのは、なぜか緊張しました。

でも、それはいつも日常的に使う「ありがとう」ではなく、十年間を振り返った「ありがとう」なので、いつもより感謝の気持ちが伝わるように、丁寧にその言葉を書いたと思います。

そして、手紙を渡したとき、母は私が渡した手紙で泣いていて、少しだけ「よかった」と思いました。それは、私の気持ちが伝わった気がしたからです。

二通目は母とけんかした時に書いた手紙です。その手紙は、夜に書きたくなくて書いた手紙でした。私が寝る前にこっそりと母の枕元に置いておきました。

そして次の日、学校に行く準備をしていて、たまたま机の引き出しを開くと、母からの手紙がありました。

その手紙には、母の文字が書いてあり、けんかしてしまったことを謝っていました。私はその手紙を読む前に仲直りしていたけれど、母も私と同じように手紙を書いていたと思うと、心がとても温かくなりました。

私が、家族と手紙のやりとりをするようになったのは、三・四歳のころです。このときからのもらった手紙はすべて、手元にあります。すべての手紙が大切に、もらっていちばんうれしかった一通は決められません。

最後に、みなさんにとっての「気持ちの伝え方」は何ですか？

私はやっぱり手紙です。でも、気持ちの伝え方は一つではないと思います。言葉で伝えるのが一番な人もいるし、メールで伝えるのが一番だという人もいると思います。気持ちの伝え方がわからないという人もいるかもしれません。自分の気持ちの伝え方ってなんだろうと考えてみてください。

あなたのいつも言えない気持ちを大切な人に伝えてみてはどうですか？





食べ物の大切さ

港小学校6年 浅井 優花

わたしは、苦手な食べ物でも少しはがんばって食べるようにしています。わたしは、納豆が苦手です。五年生の時、給食で納豆が出る日がありました。とてもいやだったけれど、給食の時に食べられるように、家でがんばって食べる練習をしました。そのおかげで、納豆を残さずに食べることができました。一人一人が、苦手な物でも少しずつがんばって食べる事ができれば、食べ物を捨てる量を減らすことができると思います。

五年生の国語の授業で、「食品ロス」のことを知り、もっと食品ロスについて知りたいと思い、調べてみました。

食品ロスとは、本来食べられるのに捨てられてしまう食品のことを言います。日本では、一年間に約612万トンもの食品ロスが出ていて、それにともなって、様々な問題が起きています。

まず、食べ物の生産や運ばんに使われた石油や石炭などのエネルギー資源をおだにしているということです。エネルギー資源には限りがあるので、大切に使うしなければなりません。また、使えば使うほど、環境にもよくない影響が出てしまいます。学校の給食も、教室へ運ばれて来るまでに、たくさんエネルギー資源が使われます。それと同時に、漁師さんや農家の人、栄養たっぷりの献立を考えてくれる栄養士さん、おいしく作ってくれる調理員さん…。私たちが食べるまでに、たくさんの人の努力や思いがあり、その人たちの思いもおだにしてしまうと思いました。

わたしのおじいちゃんは、畑で野菜を作っています。たくさん野菜ができた時は、おばあちゃんが知り合いに配ったり、野菜を冷たく保存して食べています。それは、おじいちゃんが時間をかけて、一生けん命作った野菜がおだにならなようにというおばあちゃんの思いがあるからだと私は思いました。これまでよりも、感謝して食べようと思いました。

次に、食品を捨てるということは、うばった命をおだにすることになります。わたしたちは、お米や野菜、肉や魚を食べるとき、大切な命をいただいています。だから、食べ物の命にも感謝の気持ちを忘れないようにしていきたいです。

それから、「食べ物がある」ということは、当たり前ではありません。世界には、食べるものがなくて困っている人がたくさんいます。異常気象や災害、戦争により、日常の生活ができない人、貧しくて食べ物が買えない人もいます。二〇一八年には、世界の人口の約九人に一人が食べられなくて苦しんでいて、今もその数は増え続け





ていることを知りました。それなのに日本では、大量に食品が捨てられていることがとても残念です。食品ロスの中には、まだ食べられるのに捨てられてしまう物もたくさんあります。だからわたしは、まだ食べられるものは捨てるのではなく、食べるものが買えなくて困っている人に届けられるようになること、食品ロスも減り、困っている人も助けられると思いました。その取り組みを、「フードドライブ」というそうで、広まってほしいと思いました。

これから先の未来へ、食品ロスを減らすために、わたしたちは何ができるのでしょうか。わたしがまずできることは、買い物に行く前に冷蔵庫の中にある食材を見て、買う必要のある物をメモにして、買いすぎないようにすることです。他にも、食品を買う時に、すぐ食べるものは消費期限や賞味期限の近い物から選べば、お店で出る食品ロスも減らせると思います。

人間は、食べ物がないでは生きていけません。大切な食べ物が捨てられてしまうことを防ぐには、みんなで意識をし、協力して、みんなが残さずにおだなく食べることが大切だと思います。これからは、食べ物が作られるまでに使ったエネルギー資源、食材を作ってくれる人の努力、「命をいただいている」ということ、そしていつも料理を作ってくれているお母さん、食べ物を買うために働いてくれているお父さんにもっと感謝して、残さず食べていきたいです。

私のやるべきこととは

翼小学校6年 杉浦 春妃

私は休日によくお母さんと買い物に行きます。重い物を持ってあげたり、カートを引いてあげたりします。そして、最後はセルフレジでバーコードを機械に読ませて、会計をします。バーコードを読ませる時のピッピという音が好きで、買い物をした後は必ずセルフレジでピッピします。

「今日もピッピしようよー」

いつも通り、セルフレジでピッピしていたら、店員さん達が隅の方でこそこそ話しているのが聞こえました。

「このままセルフレジが増えていったら、私達の仕事がなくなっちゃうわ。」

その時、なるほど、と思いました。もしこのままレジだけでなく、飲食店や工場、会社など、いろんなところにロボットが設置された





ら、人間の働く場所がどんどん少なくなってしまう。すると、仕事につけない人達は、お金が稼げなくなり、生活が苦しくなります。そういう人達がどんどん増えていくと、物が売れなくなり、お店も貧乏になり、日本中が貧乏になります。このように小さな出来事から日本中を巻き込んでしまうのではないかと考えていたら、ロボットだらけの社会で大人になるのが少し怖くなりました。

その日の夜、夕飯の後に何気なくテレビをつけたら、「ミシンはどうやってできたのか」をイラストや劇で教えてくれる面白そうな番組がやっていました。それを見ていたら、興味深い小さなストーリーを知りました。今から百八十年ほど前のある日、ミシンを発明したフランス人がその地域で少し有名になった時のことです。布を編んだり縫ったりする仕事をしているいろんな人が、そのフランス人に対して、

「なんでこんな物を作ったのよ。私達の仕事がなくなっちゃうじゃないの。」と怒ったそうです。

その話を聞いた瞬間、すぐセルフレジのことを思い出しました。「ミシンとセルフレジは同じだな。どちらも私達の働く場所を減らしてしまうものだ」そう思う一方で、「じゃあ、どうすれば人々の仕事場が増えて、大人になるのが楽しみになるのかなあ」と考えてみました。毎日、毎日考えました。

すると、ふと私の中で、一つの疑問が生まれました。ミシンは嫌がられていたはずなのに、なぜ私の家に存在しているのだろう。

そこで、私は改めて、ミシンの歴史について調べてみました。その歴史を短くまとめると、同じような年代に、フランスの他にイギリスやアメリカなどでミシンを発明して特許をとり、博覧会などで発表していた人がいました。イギリスやフランスは「仕事がなくなる」とミシンを無視していましたが、アメリカだけは、ミシンのいいところを考え、ミシンを認め、大量生産し始めていました。このような当時のアメリカの考え方が現在の便利な社会につながっていると思いました。

それならセルフレジも、ミシンのようにいいところがあるのではないかと考えてみました。例えば、セルフレジがあれば店員さんはレジの仕事をする必要がありません。その代わりに食品管理やお客さんへの対応など、人間ならではの、ロボットにはできない真心をこめた丁寧な仕事に全力で取り組めるようになります。そうなれば、きっとお店が繁盛し、世の中が豊かになっていくでしょう。

このように、新しい発明品やロボットが発表された時に、ネガティブに考えず、ポジティブに考え、多くの発明品を世の中に広げていけば、世界中の人々の生活が豊かになるはずですよ。

そのためにも私は、ここに宣言します。世界中の人々の暮らしがより良くなり、大人になるのが楽しみになるような明るい未来を実現するために、ロボットと人間が共存する道について考えることを





やめません。そうすることが、変化していく社会で生きていく私達のやるべきことだと思います。

「届け。」

高浜中学校3年 加藤 美仰

「変な眼。」

「どこ向いてるの。」

幼い頃からずっと、そのように言われ続けてきました。話しているときには必ず相手の目線と合わせるように意識してきたし、見たいところはきちんと見えている。自分では何も変なところはなく、普通にしてきたはずでした。普通に行っているはずなのに、変と言われ、笑われる。心無い言葉ばかり自分だけに投げつけられる。本当に、心苦しいとしか言いようがなかったです。私になぜ、そのような言葉を言われ続けていたのか。

『斜視』

それが、私の生まれつきの眼です。斜視とは、弱視になる可能性は多いものの、見え方には問題がない。しかし、人から見ると片方の眼の位置がズレていて、両眼の視線が正しく目標に合致できない状態の病気をいいます。後から母親に聞いたのですが、私の場合は少し酷く、右眼で目標を見て、左眼は白目に近い状態になっていたため、どこを向いているのか分からなかったそうです。

自分が他の子と違うと気付いたとき、これまで言われてきた言葉の意味がようやく分かり、走馬灯のように溢れてきました。

「普通じゃない。」

事実を受け入れられず、苦しみました。

そんなとき、私を変えてくれた出来事が二つありました。

一つ目は、お世話になっている病院の先生との出来事です。私が落ち込んでいるときに仰ってくださった言葉が忘れられません。

「斜視って、それも一人一人の個性でしょう。どこを向いているか分からないって、自分だけの秘密みたいでかっこいいじゃん。自分に自信をもってみなよ。」

ああ、こんな考え方もあるんだ。かっこいい。自分の個性がかっこよくて、大好きになれました。私の考え方を教えてくれた先生には感謝の気持ちでいっぱいです。





二つ目は、つい先日起こった出来事です。休み時間、クラスで過ごしていると、教室の隅にいた男子が

「○○の眼、バグってる。」

「それな、どこ向いているか分かんねえ。」

「なんで右眼と左眼が違う方向にあんの。」

と会話しているのが聞こえました。私はハッとしました。それは昔、私が言われ続けてきた言葉と同じだったから。男子たちが話していた名前に聞き覚えがありました。それは私と同じ斜視を持っている子でした。

誤解してほしくない。斜視は生まれつきの、一人一人の個性。病院の先生の言葉が頭をよぎりました。

でも、その時の私には、何もできませんでした。

今、斜視の方は日本に約一万人以上いるとされ、全人口のおよそ三パーセントにあたるそうです。決して珍しい病気ではありません。しかし、周りの人に聞いてみると、ほとんどの人が斜視を「知らない」と言います。斜視という病気を少しでも知ってほしい。私と同じ思いをしている子を少しでも救ってあげたい。

私は、今の自分にできることとして、インターネット上で隠さずに自分の個性である斜視について話し、そして個性について知ってもらえるよう、たくさんの方と話すことを考えつきました。

今、それを実現させるために、SNSのプロフィール欄に「斜視持ち」と書き、学校での出来事や悩みなど、斜視の話題を出して、悪いものではない、普通はそれぞれだと、自分の考えを発信しています。

些細なことかもしれないけれど、私が少しずつ広めていけば、こんな些細なことが広がって、いつかクラスの隅で話していた男子たちへ、願わくば、世界中で私と同じように悩んでいる方たちへ届いてほしい。そんな私の主張をここに書き留めます。届け。

間違いから学ぶ

南中学校3年 磯道 秀伍

先日、「敗れた藤井聡太王将『違う手だった』」というネットの記事を読みました。僕の中で、藤井聡太棋士のイメージは、「どんな強い相手にも勝つ」というものでした。それでもこの対局で藤井棋士が負けたのは、何か間違いをしたからではないかと思いました。それと同時に、「あんなに将棋が強い藤井さんでもたった一つの間違い





で負けてしまうのだな」と思いました。対局後の会見で藤井さんは、「自分の読みが甘かった。」と言っていたそうです。

藤井さんが間違いをしてしまった局面は、普通の人には、気づくこともできないような領域だったようです。その間違いや失敗は、彼にとって、とても価値のあるものなのではないかと思います。自分の一手を振り返って、次につなげることになるからです。

僕は今までにたくさん間違いをしてきました。ささいな間違いから、大きな間違いまでさまざまです。先生や親からは、「間違えてもいいよ。」と、何回言われたかわかりません。しかし僕は、「間違えることは恥ずかしいことだ」と思っていました。間違えたら恥ずかしいという思いから、自分から挑戦できたことでも、挑戦することをやめてしまっていたと思います。振り返ってみると、たくさん出来事があります。授業中に挙手をするのをやめてしまったり、部活動でのプレーをやめてしまったり。いろいろな場面で、さまざまな間違いがありました。

しかし、間違えることは全て悪いことでしょうか。間違えないと気づかないこと、間違いをしないと学べないこともたくさんあるのではないかと思います。

僕は、今通っている学校こそ、一番間違いに気づくことができる場所だと思います。

学校にはいろいろな人がいます。いろいろなことが起こります。その中で、いろいろな「間違い」にどれだけ気づくことができるかで、学ぶことのできる内容や量が変わっていくのではないかと思います。

例えば、間違いとは少し違うけれど、友達とけんかをしてしまうことも、友達と自分との違っているところに気づくことができ、さらに成長できるチャンスだと思います。

さらに、そこから仲直りをするのであれば、自分のことを見つめ直し、相手のことを考えて、「次につなげる」ということができると思います。そういう意味では、けんかも間違いに気づくことのできる、素晴らしいことの一つだと気づきました。僕が経験したけんかでは、はじめこそ対立していても、相手と直接話し合うことによって、自分の間違っていたところに気づき、友達との関係をよりいっそう深めることができました。これは、「間違えないとわからないこと、間違えないと学べないこと」であるということ、僕自身が身をもって体験できた出来事です。

このような出来事から、「間違いは誰にでもあって、恥ずかしいものではない。それ以上に、自分自身が成長をすることができ、新たなことを学ぶチャンス」であると思いました。将棋界のトップにいるような藤井さんでも、間違いをすることがあるのです。

間違いは、そこからさらに次につなげていけるような素晴らしいことです。恥ずかしさを感じて避けてはいけないと思いました。間違いも失敗も、全てがこれからの自分に生きてきます。だからこ





そ、「失敗は成功のもと」ということわざがあります。

誰でも、間違いを恐れたり、恥ずかしがったりせず、日常的に、ささいなことにも自分から挑戦していけるような世の中になってほしいと思います。

そのためには、たとえ友達が間違いや失敗をしたとしても、からかったりせず、共に間違いの大切さを理解し合うことが大切だと思います。そして、さらにたくさんの人に「間違いは恥ずかしいことではない」ということを広めていきたいです。

「自分らしく」生きるということ

愛知県立高浜高等学校3年 山口 稀

皆さんは、「自分らしさ」という言葉を耳にしたり考えたりしたことがありますか。私は今、高浜高校の福祉科で介護福祉士の資格取得を目指すため、介護実習を毎年しています。この経験の中で「自分らしく」生きることについて考える機会がありました。

介護の現場はとても忙しく、多くの職員の方々が利用者さんに対して様々な援助を行っています。そのため、日常生活では意識しないようなトイレの利用についても、時間を設けてトイレに行くのを待ってもらうことがありました。もちろん、利用者さんの怪我などの防止のために行っていることなのですが、「行きたいと思った時に行けない」という状況を、その時の私は心苦しく思いました。

また、認知症を患っている利用者さんで、「家に帰りたい、家族に会いたい」とおっしゃっている方がいらっしゃったこともありました。認知症が進んでいる場合、施設への入所を判断するのは多くの場合その家族になるはずですが、そうすると、このように本人の意志とは異なる結果になることが多くなるのは想像の範囲内だと思います。

さらに、今では介護施設を利用する方の中にも職員の方の中にも、外国籍の方がいらっしゃいます。介護実習中に外国籍の職員の方と話をする機会があり、いろいろなことを尋ねることができたのですが、やはりコミュニケーションが難しく、利用者さんや職員の方との関係を築くことに苦勞しておっしゃっていました。

そのような経験を通して、現在の世の中においても様々な原因から「自分らしく」生きるというのは難しいことなのかも知れないと思いました。





一方で、利用者さんの意見を聞き入れて、自由な時間を過ごしてもらおうようなこともありました。些細なことかもしれませんが、利用者さんが自分の好きな飲み物を選べたり、どこまで散歩に行くのか決めたりする時は、とても素敵な笑顔を見ることができました。ささやかな出来事ではありましたが、私の心にその笑顔が強く残ったのは、制限が多い生活の中で自分の思ったようにできたという満足感は、生きていく中で非常に重要であるということになるのが実体験を通して分かったからだと思います。施設の方も、たくさんいる利用者さん一人一人の気持ちやニーズに応えるのはとても大変だと思います。しかし、この笑顔のために工夫したり努力したりすることができるのだと感じることができました。

そう考えると、それぞれ違う「自分らしく」を認め合える社会を目指すために、相手と向き合い、相手のことを大切に思うという、人として一番大事なことを忘れてはいけないと強く思うようになりました。そして、そのために「心にゆとりがある社会」が必要だと思います。「できるだけ短い時間で効率よく」というのは聞こえはいいかもしれませんが、それは人々の心のゆとりを奪っているように感じます。時には、ただ効率を求めるのではなく、相手のことを慮って待つことや、相手の時間に身を委ねることも大事な思いやりだと思います。

しかし、個人のカだけではこのような社会を作り上げるのは難しいと思います。心の余裕がある社会を目指して、会社や施設が、国や県や市町村が同じ方向を向いてこそ、よりよい社会システムが構築できると思います。そして、私もその一員である自覚をもって、さらに、医療・介護に携わっていかうとする人間として、相手を大切に思う心で「自分らしく」を認めていきたいと思っています。





あとがき

この冊子は、各校から送られてきた少年の主張作文原稿をもとに作成しました。大会の開催に向けてご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

発行 令和5年6月

発行者 高浜市青木町四丁目1番地2

高浜市・高浜市教育委員会



